

京都工芸海外アーカイブ

2018年度活動報告

由緒ある陶家が立ち並ぶ五条坂は名実ともに現代における京焼の中心であり続けてきました。しかし、バブル崩壊から続く陶磁器業従事者の高齢化と若手人材の不足が深刻さを増す近年、地域の地価が急激に上昇したことで、五条坂の風景が様変わりが続いています。かつてやきもの産地として繁栄を極めた五条坂を知る人々は、記憶を未来に繋げることの大切さに気づき、様々な活動が動き始めています。本プロジェクトも資料をアーカイブするという側面からこの動きのサポートを行っています。

1994年に京焼の若手有志が集まり、京焼産地としての五条坂の過去を知る人々に話を聞く会が全6回開催されました。「五条坂を知る会」と名付けられたこの会の録音テープが会の主催者の手元に残っていたのです。日展で活躍し京都市立芸術大学教授でもあった藤平伸（1922-2012）や、「鉄釉陶器」で重要無形文化財保持者に認定された清水卯一（1926-2004）など、五条坂で生まれ育ち20世紀の京都の陶芸界を支えた人々が京焼について語った貴重な記録です。本プロジェクトでは、著作権保持者から複製の許可を得た音源をデジタル・データに変換し、翻刻作業を始めました。

20年以上前の「五条坂を知る会」に呼応するかのようになり、昨年から「京都やきものWeekわん碗ONE」の企画として「語り継ぐ 五条坂茶わん坂」が始まりました。本プロジェクトリーダーの前崎が司会を担当し、四代諏訪蘇山氏、九代高橋道八氏と共に、五代三浦竹泉氏から戦中・戦後の五条坂についてのお話を伺いました。今後はこれらの音源の翻刻作業を続け、京焼の記憶アーカイブの構築を進め、最終的には成果を書籍として出版することを目標としています。

近現代の京焼デジタル・アーカイブの構築も引き続き継続しています。京都市内の個人が所有する近現代の京焼コレクションの調査・撮影を行いました。調査は本プロジェクトと近代工芸研究会が主催し、帝室技芸員の七代錦光山宗兵衛（1868-1927）、初代伊東陶山（1846-1920）、宇野三吾（1902-1988）の作品、42点の高精細デジタル撮影を完了。このように本年度は国内の京焼関連のデジタル・アーカイブ化への依頼が多く、海外アーカイブの作業があまり進まなかったのが課題として残りました

前崎 信也（芸術資源研究センター非常勤研究員）